

シンデレラ

お城の近くの立派な邸宅にシンデレラという女の子がいました。

シンデレラは、早くにお母さんを亡くし、継母とその娘たちと暮らしていました。

シンデレラは、継母やお姉さんにいじめられ、いつも汚い身なりをして、薪割などをしていました。

ある日、お城で舞踏会が行われることになりました。お城には、ちょうど婚期を迎えた王子様がいました。

「もしかしたら私、王妃になれるかもしれないわ」

シンデレラのお姉さんたちは、そんな風に期待しておめかししていました。

「シンデレラ、お前は留守番だよ」

「汚い顔を見せるんじゃないよ」

「一家の恥さらし」

そんなことを言って、継母とお姉さんたちは、舞踏会に向かいました。

「ああ…舞踏会に行けたらな…」

「行きたいの？」

「あなたは？」

「貴方の魔法使い」

「魔法使い？」

「ええ、何でも望みを叶えるの」

「…舞踏会に行きたいんです…」

「行ってらっしゃい」

そう言うと、シンデレラの汚れた服が一瞬にして立派なドレスに替わり、かばちゃは馬車になり、近くにガラスの靴もありました。

「ただし、魔法は夜の12時に切れてしまうの。忘れないでね」

「どうお礼を言えばいいのか…」

「楽しんでらっしゃい。それが礼儀よ」

「涙が出ちゃう」

シンデレラは、颯爽と舞踏会に出かけました。

普段汚い服を着ているので、誰もシンデレラに気付きませんでした。しかし、シンデレラは、その愛くるしい笑顔で、周りの殿方を魅了しました。もちろん、王子様も。

「一緒に踊ってください」

「私でいいんですか？」

「ええ、貴方と踊りたいんです」

「踊ったことはありません」

「大丈夫、僕の隣にいればいい」

王子様と踊るシンデレラは、それはもう、生き活きとして、この世のものとは思えぬほどの魅力でした。

「あっ、いけない！」

「どうしたんだい？」

「帰らなくちゃ！」

もう数分で夜の 12 時になりそうだったんです。

シンデレラは、急いで、外に出て、階段を駆け下り、馬車に乗り込もうとしましたが、途中で転んで、ガラスの靴を片方落としてしまったのです。取りに行けば、間に合わない。苦渋の選択を迫られたシンデレラは、靴を残し、馬車に乗って、逃げ帰ってきました。

舞踏会は終わり、ガラスの靴だけが残されました。王子様は、家来に言いました。

「この靴に合う、あの女の子を探し出してほしい」

家来たちは、町中の女の子に靴を履かせますが、合いません。

そして、シンデレラの邸宅にも、やってきました。

継母に見守られ、お姉さんたちも履いてみますが、合いません。

その時、ふと、外を見やると、灰まみれになって働く、シンデレラの姿がありました。

「あの子ではないだろう」

家来は、邸宅を後にしました。すると、不思議なことがありました。馬車がかぼちゃになっていたのです。驚いた家来は、王子様に連絡。

王子様が駆けつけました。

王子様は、シンデレラの姿を見て一言。

「靴を履いてくれませんか」

「・・・はい」

靴は、まさにシンデレラのために創られたようなものでした。

「ピッタリだ。舞踏会の王妃ですね」

「・・・王妃ではないです」

「いや、今からなるんです」

「・・・ダウン症なんです、私」

「知っています」

「じゃ、なぜ？」

「だからこそ幸せにしてあげたいんだ」

「王子様…」

王子様は、シンデレラをぎゅっと抱きしめ、言いました。

「亡くなった君のお母さんにはお世話になったよ」

「ご存じなんですか」

「天国からずっと見てたさ」

「お母さん…あの魔法使いは…」

「さあ、祝杯を上げよう！未来の王妃のために！」

王子も家来もみんな王妃の歓迎の儀式を執り行いました。

「その靴、君のお母さんが履いていたものだよ」

「やっぱり…信じてもらえないかもしれませんが、魔法使いになったお母さんに貰ったんです」

「信じるさ。君のお母さんならできそうだ。誰よりも君を愛していた」

「…（泣）」

シンデレラは、ただただ泣くばかり。

「主役がそれじゃ、盛り上がらないぞ。ぷりっ」

王子様は最後に屁をこいた。

「…（笑）」

「そう、それでいい。最後は笑ってなきゃ始まらない」

了